

都道府県名	徳島県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	穴吹町立穴吹小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	2	1	2	1	9	15
児童数	26	23	24	42	26	42	3	186	

研究の概要

1. 研究主題

わかる できる 学び合う子どもたち  
～ 基礎・基本の確実な定着をめざして ～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

第1学年から第6学年の全ての学年で実施

**算数** 個人差が著しく、児童のつまづきが顕著に表れる教科であるため。平成13年度から実践研究している。平成14年度徳島県小学校算数教育研究大会で授業公開。

**国語** 読み書きはすべての思考や活動の基になるものであり、読み書きの習熟により思考や活動の発展を促すことができると考える。また、日常生活と切り離せない教科であるため。平成15年度より国語力向上モデル事業推進校指定を受けて実践研究している。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 算数科 考える力を高める算数的活動の構想と実践 ～ 基礎・基本の確実な定着をめざして～</p> <p>仮説 「考える力」とは 算数科の多面的な目標に生きてはたらく、数学的思考方はもとより、それを生かし活用する能力や態度をも含めて、「考える力」ととらえられる。</p> <p>算数的活動について 算数的活動は、算数科の目標を実現させるための学習指導方法としての意味を持つものであり、学習活動の中に算数的活動を取り入れることにより興味関心を高められる。 また、操作しながら考えることで、児童がより多様な考え方を生み出すことができる。</p> <p>基礎・基本の確実な定着について 算数の基礎・基本とは、「子どもたちの日常生活での活動の基になるもの」「学校でのいろいろな学習の基になるもの」「将来の社会生活や生涯にわたっての活動の基になるもの」など、子どもたちのいろいろな活動の基になる大切なものであるととらえられる。</p> <p>研究内容・方法 日々の授業を充実させることはもちろんであるが、朝の15分間の活動の時間では漢字や計算のドリルも大切にしながら、国語・算数の教科学習につながる幅広い技能の習得もできるように配慮する。</p> <p>(1) 朝の活動の時間に 火・水・金曜日 8:15～8:30に実施している。 読書、漢字・計算のドリル学習を一日ずつ行う。プリント学習だけでなく、児童の関心・意欲を高めるために様々な活動を工夫する。たとえば、手先の器用さを身につ</p>
--------	---

けさせるためのゲームや模様づくりなど。

音読は日々の家庭学習に課し、繰り返し行うことにより定着を図る。

(2) ティーム・ティーチングを全学年で

算数科において教師が2人で指導する。1人の教師(T1)が授業を進め、もう1人の教師(T2)が個別指導にあたる。

- ・2人の教師が指導することにより子どもを多面的にみて、長所を見つけ、個性の伸長を図る。
- ・教材研究、学習指導法にも広がりや深まりが出るようにする。
- ・個別指導を休み時間や放課後にも時間をとって行う。

コース別学習

高学年になると、子どもたちの間では習熟度に関差が見られ、一斉授業では課題を解くのに時間が足りない子と、逆に時間を持て余す子の差が顕著に表れる場面が見られる。そこで、どの子どもも充実感をもてるよう、また個に応じた指導をする展開の上から、6年生では担任とT1で基本問題を中心にする「じっくりコース」、発展問題を中心にする「どンドンコース」の2つのコースに分かれての習熟度別の学習を行う。

- ・学習内容から、1時間の全部を2コース別の学習にするか、授業の終末だけ2コースに分かれて学習するかを、T1とT2で話し合っで決める。
- ・コースの選択は、主に児童の希望を優先するが、教師の評価も加味して決定する。このとき、コースに分かれてもそれぞれの選択を認め合う自然な学級の雰囲気保たれるようつとめる。
- ・コースの変更は毎時間自由にできるようにしておき、だれもが納得してコース選択ができるように配慮する。

(3) 算数的活動の工夫

- ・算数の学習が、子ども中心の主體的なものとなり、楽しくおもしろくよく分かる授業になるようにする。
- ・どのような「算数的活動」を、どの場面で取り入れるのが効果的であるか、教材研究をする。
- ・低学年では意欲的に学習に取り組み、集中力を高めるために他教科と関連させる。

(4) 児童理解をするために

- ・一人一人の児童の実態をより理解するため、新しい単元を学習する前には、既習事項の定着度を把握できるように診断テストを行う。
- ・内容は、前学年の教科書や指導書、テストなどを参考にし問題を作成する。
- ・児童のつまずきがどこにあるかを把握し、個別指導を行う。
- ・評価については、単元導入時、終了後の評価に限らず、常に形成的に評価をする。
- ・授業の終わりに学習を振り返る時間とって、ワークシート、ノート、自己評価カードなどに学習後の感想や反省を書くようにする。
- ・自己評価や友達との相互評価では、自分や友達の考え方のよさに気づくようにはたらきかける。
- ・ノートには 簡単なマークを使い、自己評価が一目で見て分かるノート作りを心がけるよう指導する。
- ・常に互いのよさを認め合い、学び合う態度を育てるようにする。

(5) 研修

- ・講師を招いての研修会を持つ。
- ・評価規準を明確にし、年間の指導・評価計画を作成する。
- ・各学年の授業研究会を行う。
- ・町人権教育研究会の会場校として、人権教育の授業研究会を行う。

平成  
15  
年度

テーマ

わかる できる 学び合う子どもたち  
～基礎・基本の確実な定着をめざして～

仮説

すべての教科において人の話を聞くことから学習は始まり、「読み・書き・計算」という言葉の並びの通り、まず、読めて書けることが、学力を高めること、学習したことを伝えたり、記録して残したりすることの基礎基本であるととらえられる。

国語力について

人間関係を築いていく上で、自分の思いを言語を通して伝えたり相手の意見を受け止めたりすることは大切な行為である。自分の考えを明確にし自信を持って表現できることが国語力であり、日常の中で生きてはたらく力であると考えらる。

研究内容・方法

- ・算数科では、実践研究を継続して行い、前年度と今年度を比較検討しながらよりよい方向へ修正できるよう配慮する。

・国語科において、伝える力(書くこと)に重点を置き、指導する。授業を充実させることが第一であるが、1～6年生までの国語力を段階的・系統的に見据え、朝の15分間の学習活動でも「書くこと」の基礎的な力の育成に取り組む。

(1) 朝の活動「ねっこタイム」の実践

火・水・金曜日8:15～8:30に実施している。

「漢字」「視写・聴写」「語彙」「短作文」の4項目を1週間サイクルで学習する。

「漢字」では前学年の振り返り学習ができるようにし、「視写・聴写」では書くことの基礎的な技能を身につけるとともによい文に出合わせるように配慮する。「語彙」では児童が意欲的に学習できるようことばのゲームやあそびを取り入れ、「短作文」では同一テーマで全校一斉に実施し掲示コーナーに掲示する。

また、図書室や学級で本に親しむ機会と環境作りをし、常時読書活動ができるようにする。

(2) ティームティーチングを全学年で

国語科・算数科において実施する。T1が授業を進め、T2が個別指導にあたる。

・2人の教師が指導することにより子どもを多面的に見て、個性の伸長を図る。

・教材研究や学習指導法・評価に広がりや深まり・客観性が出るようにする。

・適時、個別指導をする。

習熟度等のコース別学習

算数科では高学年になると習熟度に関差が見られ、一斉授業では同じ課題でも自力解決に差が出る。そこで、どの子どもも充実感を持って学習できるよう、6年生では担任とTT教員で、基本問題中心の「甘口コース」、発展問題中心の「辛口コース」の2つに分かれて習熟度別の学習を行う。

・1学級の授業でのコース別学習だけでなく、学年全体(2学級)の授業でのコース別学習もできるようにする。

・3人の教師が関わるため、時間割の変更が無理なくできるように配慮する。

・1単位時間をどのようにコースに分けるか話し合って決める。

・コースの選択は主に児童の希望を優先するが、教師の評価も加味して決める。

・コースの変更は毎時間自由にできるようにしておき、誰もが納得してコース選択できるように配慮する。

(3) 班活動を取り入れて

一斉学習では関心や意欲を持って学習に取り組めなかったり、課題の自力解決がむずかしかったりする児童も、班で分担したり交流し合ったりすることで1人の負担が軽くなる。また、児童は互いのよさを認め合うことができ、指導する側はより細やかな指導ができる。

(4) 読書へ広げる授業形態について

読書を通して表現力を豊かにする授業作りをする。そのために、児童の実態と身に付けさせたい力に応じて国語科の単元を構成し、その中に読書活動を位置づける。単元前の意識付けとして、題材に必要な資料や関係図書を揃え、教室環境を整えておく。

単元中の意欲を継続させるために、目的意識・相手意識を持った発表の場を用意しておく。「何のために」「いつ」「誰に向けて」伝えるのかを明確にする。

付箋紙やワークシートを効果的に使用したり、目的に応じたモデル文を提示したりして情報の活用化・共有化ができるようにする。

(5) 児童理解をするために

・一人一人の児童の実態を理解するため、朝の学習活動もTTで指導する。

・児童のつまづきがどこにあるかを把握し、個別指導を行う。

・単元前・単元後には診断テスト等を行い、学習事項の定着度や理解度を把握する。

・日常生活や他教科との関連を図りながら、言語感覚・数量感覚を養う。

・評価については、診断テストの評価に限らず、常に形成的に評価する。

・人権教育を徹底し、豊かな感性を育てる。

(6) 研修

・講師を招いての研修会、授業研究を行う。

・評価規準を明確にし、年間の指導・評価計画を作成する。

・他校・他県の研究会に積極的に参加し自己研鑽に努め、指導力を高める。

平成16年度

テーマ

わかる できる 学び合う子どもたち  
～基礎・基本の確実な定着をめざして～

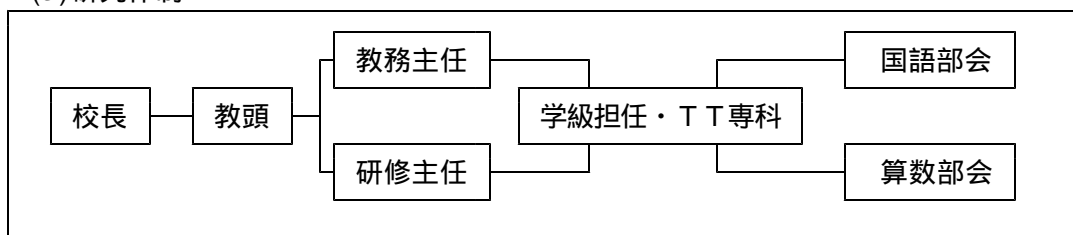
仮説

個々に学習したことを、集団の中で伝え共有することにより、知識・技能、学び方・考え方に広がりや深まりができる。互いに自分の意見を述べ、練り上げることにより学習内容が一層確実に定着する。

#### 研究内容・方法

- ・国語科では、伝え合う力、相手に分かるように発信する力を高めるため、「書くこと」を中心に表現する力の育成にも指導の重点をおく。常に、目的や相手を意識した表現をするよう、はたらきかける。
- ・算数科では、平成 14 年度からの実践研究を継続して行う。
- ・国語科・算数科ともに、平成 14 年度・15 年度と今年度を比較検討しながら、よりよい方向へ修正し、3 年間のまとめをする。
- ・人権教育を徹底し、一人一人が認められる集団づくりをする。
- ・講師を招いての研修会、授業研究を随時行う。

### (3) 研究体制



### ・平成 15 年度の成果及び課題

#### 成果と課題

##### (1) ティームティーチングについて

本校は 11 年度からティームティーチングによる指導を行っている。児童は、ティームティーチングについて「二人の先生が教えることによって、勉強の内容がよく分かり、分からないことは聞きやすい。」というように捉えている。また、教師側からは、「分からないことを積極的に質問する児童が増えてきている。また、二人の教師が教えることを児童は違和感なく受け入れ、児童からの質問や理解できていない児童にすぐに対応できる。」などの意見があった。これまでに、二人の教師が指導することによって、児童を多面的に見ることができ、教材研究や学習指導法にも広がりや深まりが出るという効果があった。ただ、T1T2の二人でどの児童にも指導が行き届くように心掛けたのだが、それでも、机間巡視においても全員を見ることができない場合があったり、「二人の先生に注意されていやだった。」という児童もいるなど、特定の児童を意識しすぎることもあった。これらを考慮しながら、さらに指導方法等についての研修を深め、全教職員が共通理解して取り組んでいきたい、また、教師間で話し合う時間を少しでも多く確保していき、児童のつまずきがどこにあるのかを知り、有効な個別指導を行えるようにしたい。

##### (2) 習熟度別学習について

児童はコース別に分かれることにあまり抵抗はないようである。コースを選ぶ時、「今日は辛口(コース)でがんばれそう。」という声が聞かれる。コース別に分かれることに対して児童は勉強の内容がよく分かる、選んだコースは自分に合っていると感じているようである。児童の意見や希望を優先してコースを選択していることにより、児童が自分に合ったコースで課題に取り組むことができる。しかし、児童の意見や希望のみでコースを選択するのではなく、教師の評価を加味することも大切である。今後は、教師間で情報交換をすることにより、児童の理解の程度や進み具合など児童の実態を確実に把握し、児童がどのコースに行くのが効果的か考えていきたい。また、教材研究を十分にし、どの単元のどの時間にコース別に分かれるのが効果的なのかを考えて授業を工夫していきたい。そして、どのような問題を扱うか内容を吟味し、児童が意欲的に取り組めるようにしていきたい。

##### (3) 班活動を取り入れた授業について

普段話すことや書くことに苦手意識を持っている児童も、友だちの助言や話し合いの中で、話す内容や書く内容を理解することができる。書くことにおける班活動では付箋紙を使い、互いの文章に追加・交換が容易にできるようにした。自分と違う意見や別の文章表現に触れること、表現の工夫や言葉の使い方をそれぞれが教え合うことで語彙を増やすこともできた。教員の人数上の理由で、少人数指導や習熟度別指導が常にできるとは限らない本校においては、班活動を学習活動全体に取り入れることで一人ひとりの児童がより一層学習に深く取り組めるような実践をめざしている。教材の難易度が高まっていくにつれ、個人の力だけでは学習が困難な児童は増えてくる。そういった児童への支援といった意味においても効果的な班活動のあり方について研究・実践を続けたい。

#### (4) 読書活動を取り入れた授業について

児童に教科書教材だけでなく、様々な本に出あえる機会を与えることができた。自分の興味や関心に応じた本を読むことで、積極的な学習が可能になり、一人ひとりの手元に本を置くことで必要な時に必要な情報をすぐに探すことができる。さらに、様々な情報に触れたり述べ方の工夫を知ったりする機会を増やすことで自分の考えを明確にし、表現していこうとする力につながられると考える。今後、日記や作文、各教科でのまとめなどに役立てていけるようにしたい。

その反面、様々な本を一人ひとりが読むことで必要な情報や選択を各自に任せることになる。どの情報を使っていいのか分からず、考えがとまってしまう児童も見られた。教師の支援のあり方や班での活動のあり方の工夫が重要だと分かり、課題に残った。

#### (5) 朝の学習活動について

年間計画を作成し、学年間で関連を持たせて取り組むことによって、自ずと段階的・系統的でしかも国語の授業と結びついた学習ができるようになった。また、プリントなどの学習物はファイルに綴じて次学年に繋げていくので、省略したり深めたり重点化がしやすくなる。1週間通して同じ領域を学習するので前日の成果との比較ができ、修正や発展的指導も可能になる。これからの課題としては、学習者にとって魅力的で効果の上がる資料の作成や準備にかかる時間的の確保、児童個々の理解や定着の実態がよく分かるような評価方法の開発等があげられる。

#### ・ 学力把握のための学校の取組について

国語科・算数科について単元ごとに、観点別・領域別におけるテストをして一人一人のデータを蓄積し、分析する。そして、児童のつまずきを少しでもなくし、長所を伸ばすよう評価し、後の指導に生かすようにする。

・フロンティアスクールとしての成果の普及について

平成 14 年度	11 月 15 日	徳島県小学校算数教育研究大会を兼ねる。全県対象 研究主題 「考える力を高める算数的活動の構想と実践」 ～基礎・基本の確実な定着をめざして～
平成 15 年度	2 月 26 日	広島県板城小学校来校 公開授業の後，情報交換を行う。
平成 16 年度	11 月 12 日	公開授業を実施する。 国語力向上モデル事業推進校の発表も兼ねる。 「わかる できる 学びあう子どもたち」 ～基礎・基本の確実な定着をめざして～

---

【新規校・継続校】	15 年度からの新規校	14 年度からの継続校		
【学校規模】	6 学級以下 13~18 学級 25 学級以上	7~12 学級 19~24 学級		
【指導体制】	少人数指導 一部教科担任制	T T による指導 その他		
【研究教科】	国語 生活 体育	社会 音楽 その他	算数 図画工作	理科 家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	

---